

## 第2 教育研究団体の意見・評価

### ○ 全国英語教育研究団体連合会

（代表者 石田 健司 会員数 約60,000人）

T E L 03-3267-8583

#### 1 前文

今年で6年目となる共通テストは、2022年4月の高等学校の学習指導要領の改訂に伴う新課程テストであった。昨年度までと同様に、過去のセンター試験で出題された発音やアクセント、語順整序等を単独で問う問題はなく、様々な資料や図表を通して英文を読み、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う内容となっている。情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成する、という学習指導要領における目標を反映した出題となっている。

今年の共通テスト本試験『英語（リーディング）』では、昨年度に引き続き、2022年に発表された試作問題を反映した出題がなされた。「立場の異なる5人の意見を読んで、論拠を整理する」ことを求める試作問題第A問を反映した問題が第8問で、「読み手に分かりやすいように情報を整理し、文章の論理構成や展開等について考える」ことを求める試作問題第B問を反映した問題が第4問で出題された。「5領域の力を総合的に育成する「英語コミュニケーションⅠ」「Ⅱ」と、発信力の強化をねらいとした「論理・表現Ⅰ」の内容に対応」という改訂のねらいが十分に達成されたかについては後述するが、試作問題および昨年度に始まった新課程テストと大きく変わらない出題であったことは受験者にとっては取り組みやすかったと思われる。

昨年度から変更された出題フレーム「大問数8、解答数44」に変化はなかった。本文と設問及び選択肢を合わせた総語数にも大きな変化はなかったが、様々なテーマや形式の設問に対応するためには、受験者にとってはかなりの速読力が求められ、最後まで解き終えることができなかった受験者がいたことが予想される。一律な英文の読み方をするのではなく、素材となる英文の種類や示される図や資料等を理解し、目的に応じて様々な読み方をするのが要求され、設問の趣旨に合った読み方をしなければ時間が不足する。速読と精読のバランスの観点、特に思考力を測定する観点からすると、今後も語数を増やすことについては慎重になるべきである。情報量が増え、問題も複雑になり、短い時間の中で単に注意力や情報処理能力を測定するような試験に陥るのではなく、じっくりと考える時間を設定して思考力を十分に測るような試験問題であることが求められるのではないかと考える。令和8年度『英語（リーディング）』の本試験の平均点は「62.81点」であり、昨年度「57.69点」から「5.12点」上がり、やや易化したという結果になった。さらに一昨年度の本試験の平均点「51.54点」から考えると、今年の試験は受験者にとってはかなり取り組みやすい内容であったと言える。正答率や得点分布を見る限りでは、大きな偏りなどはないが、第6問のように同一英文における設問中に正答率にやや大きな開きがある問いがあるなど、設問や資料の明瞭さによって難易度が変化するようなケースについては慎重な検討をお願いしたいところである。

#### 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

令和8年度の共通テスト本試験『英語（リーディング）』は以下のような構成であった。

大問	内容	配点	設問数	解答数
第1問	「ダンスコンテストでの衣装」についてのやり取り	6	3	3
第2問	「学生寮の満足度調査」について示すウェブサイト	12	4	4
第3問	「瞑想ワークショップでの体験」を書いた文章	9	3	6
第4問	「エコ・ウィーク」についてのニューズレター	12	4	4
第5問	「図書館のブックフェア」についての3種類の資料	16	5	6
第6問	「中学生とおにぎりの店の思い出」についての物語	12	4	8
第7問	「マインド・ワンダリング」についての文章	16	5	6
第8問	「スポーツと科学技術の進歩」についての複数意見	17	5	7

第1問 資料に示された事項についての情報の読み取りとその内容の読み取りに関する設問である。設問数は3問、配点は6点であった。実際のコミュニケーションで出会う様々な形式の情報を読み取り、その情報を基に必要な情報を把握する力が求められる問題である。翌月に開催される「ダンスコンテスト」での衣装についてダンス部員4名がやり取りしているテキストメッセージを読み、示された情報を読み取る問題であった。

問1 やり取りしている内容から、ステージにおけるダンサーの安全性を懸念している部員を選択させる問題。それぞれの発言を正しく読み取ることができれば正解できる。Pat がネックレスを危ないと考えてサングラスを提案したが、続く Val はサングラスも危ないと答えており、この部分のやり取りを押さえることが必要になる。選択肢も紛らわしいものはなく解答しやすいものであった。正答率もとても高かったことから受験者にとっても取り組みやすい問題で、最初の問題はこういったレベルから始まることが望ましい。

問2 Val はステージの後半からはチェック柄のシャツを脱いで濃い色のタンクトップで踊ることを提案しており、さらにサングラスをかけることには反対していることから、正答①が解答となる。このように複数の情報を読み取らせて、さらにそれらに合致するイラストを選択させるという問題の方向性は好ましいものである。ただし、正答率は約48%に留まり、正答を導くことに苦労した受験者も一定数いたように思われる。設問文の“during the second half of the performance”という部分を確実に把握していなかったことが考えられる。求められている情報を正確に得ようとする姿勢が必要な設問であった。

問3 最後の You の発言から、ステージで着用する衣装について指導者の先生にも次の日に尋ねることが把握できる。consult が分かれば正答にたどり着くことができたはずである。You の発言の冒頭部分ですぐに解答が可能であるため、その後に出てくる available 等の語の意味が分からなくても解答できるため、やや平易過ぎるとも言える。時間の概念なども含めて、もう少し複合的な要素が含まれていても良かったかもしれない。

第2問 資料に示された事項についての概要や要点の読み取りに関する設問である。設問数は4問、配点は12点であった。「意見」の内容が問われるなど、複数の情報を客観的に判断する思考力・判断力が求められる出題となっている。イギリスの大学の“Campus Accommodation: Satisfaction Survey”というタイトルのウェブ記事であり、受験者にとっても親しみやすいテーマであったと思われる。“Campus Accommodation”というイギリス寄りの表現も興味深い点である。

問1 ウェブサイトの記事に書かれている大学事務局の「意見」を読み取る問題。正しく読解できれば正解にたどり着くはずであるが、正答率は約45%とあまり高いものではなかった。ブログ記事中の「食事が健康的であると答えた回答者は45%に過ぎなかった」という回答結果を、「学生は健康的な食生活を送るべきだ」という意見と捉えてしまったのかもしれない。事実と

意見を正しく捉える力は論理的なコミュニケーションを行う上で重要になる。今後もこの種の出題はお願いしたい。

問2 前述の学生寮の食事について言及されている部分を正しく読解できていれば正解できる問題。正答率も約83%であり、取り組みやすい問題であった。

問3 Naokiの発言の主旨を答える問題。このように発言の主たる内容を答えさせる問題は好ましい問題である。学習指導要領においても「必要な情報を読み取り、概要や要点を目的に応じて捉えることができる」力を求めており、局所的な英文読解を求めるのではなく、概要や要点の把握を求めるこの種の問題は今後も出題していただきたい。

問4 Helgaの発言を正しく理解しているかを問う問題。選択肢にも紛らわしさはなく、取り組みやすい問題であった。

第3問 物語文の内容について、登場人物の行動や心情を把握し、事象を時系列的にまとめることが問われている。設問数は3問、配点は9点であった。英語の先生が授業のために生徒に示している文章で、瞑想のような活動について、筆者の視点から語られている。

問1 筆者が瞑想に参加した活動の理由を問うている。“My father had recommended it to me.”という文が読めれば正答を選択できる。取り組みやすい問題であった。

問2 物語における事象を時系列で並べさせるという、昨年度も出題された形式である。偽肢が1つ含まれているという点も同様である。事象についての正確な時系列の把握はとても重要なことであり、偽肢が1つあることは差し支えないと思われる。今後もこの形式で良いと考えられる。

問3 Instructorの一連の行動、そしてその意味を正しく理解し、また選択肢に示された語の意味を知っていれば正答を得ることができる。設問の複雑さはないものの、正答率は約51%と必ずしも高くなかった。

第4問 昨年度から登場した新しい形式である。言わば「読むこと」と「書くこと」の統合をねらいとした問題である。題材は昨年度のエッセイからニューズレターへと変化した。「エコ・ウィークの活動」を紹介するもので、下書きについてコメントを参考にしながら、論理構成や展開に留意して文章を推敲する力が求められている。昨年度も指摘させていただいたが、文章を推敲していく過程を完成させることで、「書くこと」の力を問うていると言えなくもないが、実質的には読解力を問うていると見ることもできる。ここでの設問は標準的な読解問題でもよく見られるものである。結果的にかかなり取り組みやすい設問となっており、大問別得点率は約80%と最も高くなっている。技能を統合させて英語の力を測ろうとする方向性には大いに賛成するが、この種の設問でそれが実現できているとは言い難い。斬新な設問形式を開発し、新しい英語教育の方向性を反映させようとしているご苦労は大変なものであると拝察するが、発信技能の育成にはどのような出題が有効かを改めて考えていただきたい。

問1 クラブの顧問の助言に基づき、ポスターを作る目的を明確に示すことを求める問題である。選択肢にも紛らわしさはなく、取り組みやすい問題であった。

問2 与えられた英文の挿入個所を解答させる、という共通テストでは新形式の出題であった。一般的にはよく見られる問題形式であり、受験者は戸惑うことはなかったと思われる。

問3 ある文章をリライトさせる問題。選択肢の英文が長くなったことで負担が増えたようにも感じるが、全ての選択肢が“This activity will …”で始まっているため、受験者にとっては考えやすかったと思われる。

問4 文の一部をリライトさせる問題。英文全体を通して、エコ・ウィーク実施の主旨をつかんでいれば正解できる問題であった。

第5問 イギリスの図書館でのブックフェアについてのリーフレット、オンライン応募用フォーム、そしてEメールの3つの資料が示されている問題。昨年度のEメールのみが示されていた問題とは変化している。問題数は5問で配点は16点であった。問3、問4は複数の資料を活用することを求めている、複合的な作業を必要としている。複数の資料に様々な情報が示されており、それらの把握は全体的に負荷が強かったとも言えるが、設問で求められていることは明確で、選択肢に紛らわしさもなく、良問であったと言える。今後もこの種の設問には期待したい。

問1 ブックフェアの主旨を問う問題。設問は明快であったが、受験者にとっては選択肢がやや紛らわしかったかもしれない。

問2 ブックフェアについて当てはまる内容を選択させる問題。選択肢の内容を1つずつ確認できれば正答を得ることができる。リーフレットの中盤以降にある“If you volunteer, you will receive a book coupon.”を正しく理解する必要がある。

問3 複合的な作業を求める良問であった。お勧めの4冊の書籍について当てはまるものを選択する問題である。正答⑤(B and D)を得るためには、複数のプロセスが必要になる。文章Bの“All the books meet the budget criterion.”が該当することを知るには、リーフレットの注意事項“No book should cost more than £20.”を把握し、さらにオンラインフォームの“Price”の項が全て条件を満たしていることを確認しなければならない。文章Dはオンラインフォームの“Content”の全てに目を通して、動物が言及されていることを確かめる必要がある。思考力、判断力を問う良質な出題であった。

問4 問3と同様に、複合的な作業を求める良問であった。メールの内容とオンラインフォームの内容を横断的に確認する必要がある。

問5 メールの内容を正確に読解することができれば、正答を得ることができる問題。選択肢にも紛らわしさはなく、取り組みやすい問題であった。

第6問 物語文を読み、その内容を正確に理解するとともに、事象を時系列で把握したり、その物語文についてのプレゼンテーション資料を作成したりさせる問題である。昨年度出題された、物語を読んでその改善策を示すというような文章外の事項について問うものは出題されなかった。設問数は4、配点は12点であった。

問1 登場人物についての理解を求める問題である。正答率約27%という結果からも、受験者はやや苦勞したと思われる。これは選択肢における単語の問題もあるかもしれない。例えば、①に“rude”という単語があるが、おにぎり屋さんのご主人が無口でそっけない印象はあるものの“rude”という表現が適切かどうか迷った可能性がある。問題の方向性は良いと思われるが、この問題については選択肢の紛らわしさがあったと思われる。折角読解ができて、選択肢の紛らわしさで正答を得られないことは受験者にとっても好ましいことではない。

問2 昨年度に引き続き時系列を問う問題。昨年度の問題よりは取り組みやすかったと思われる。偽肢も1つ含まれているため、あまり複雑な時系列の把握にならないことが好ましい。

問3 ご主人についての正しい説明を問う問題。選択肢にも紛らわしさはなく、取り組みやすい問題であった。

問4 主人公についての正しい説明を問う問題。選択肢にも紛らわしさはなく、取り組みやすい問題であった。

第7問 まとまりのある文章を読み、必要な情報を整理しながら、プレゼンテーションのスライドを完成させる問題である。設問数は5問、配点は16点であった。「マインド・ワンダリング」がテーマであり、情報を効率良く的確につかみ、設問で求められている情報を本文から正確に見付け出すことが必要であった。問5では、4人の生徒のうち、「マインド・ワンダリング」の効用が

得られると思われる2人を選ぶという新形式の問題が出題された。大問得点率は約48%で最も低く、身近な話題ではないため、受験者はやや解答に苦勞したと思われるが、設問は本文の流れに沿って問われているため、その点は取り組みやすかったと思われる。

問1 シンプルな読解問題であり、該当箇所を見付けることができれば正答を得られたはずである。

問2 「マインド・ワンダリング」による効用を答える問題。選択肢に紛らわしきはないが、該当する文章が広範囲に続いているため、正答を得るために時間がかかったかもしれない。読解問題としては好ましいものである。

問3 “incubation period”という表現にはあまりなじみがないかもしれないが、文章の内容から十分に類推が可能で、説明箇所を見付けることができれば正答にたどり着くはずである。

問4 問3と同様に、“neuroimaging research”という表現にはあまりなじみがないかもしれないが、文章に全く同じ表記で説明がなされており、説明箇所を見付けることができれば正答にたどり着くはずである。このような、あまりなじみがない表現等でもある程度類推させて思考させる問題は好ましいと思われる。

問5 新傾向の問題であり、複数の資料を横断的に検討する必要がある良問である。本文中で「マインド・ワンダリング」の効用を得るための説明が示されており、それらを具体的に実践している生徒を選択させる問題である。紛らわしい選択肢もなく、設問の意図も明確で、今後も同種の出題を期待したい。

第8問 昨年度と同様、あるテーマに関するエッセイを書くために3つのステップに沿って問題に取り組むという形式での出題。あるテーマに対して、複数の意見や資料について正確に把握し、エッセイを完成させる問題である。「スポーツとテクノロジー」に関する5人の意見を読んで、自分のエッセイを完成させる形式である。5人の異なる立場を正確に把握しながら、求められている条件で設問に対応していくことは、受験者にとっても最終問としては時間との戦いがあったように思われる。

問1～2 5人の異なる意見を正確に把握することを求められている。誰の意見を把握するかは設問で明確にされているので、得るべき情報は見付けやすく、取り組みやすい問題であったと思われる。ただし、本文の量が多いため一定の時間を要する問題ではあるだろう。

問3 5人の中から自分の立場を支持する2人を選び、さらにその内容を問う問題である。5人の意見と要点をまとめながら効率良く情報をまとめていく必要があり、共通テストらしい良問となっている。

問4 ある程度のまとまりのある英文を読み、そこから自分の立場の根拠となる論を選択する問題。文章の概要や要点をつかむ力が必要となる。選択肢の紛らわしきはなく、受験者の力を測る良問であったと言える。

問5 グラフから自分の立場の根拠となる論を選択する問題。グラフが示している情報を文章と共に理解することが必要であり、複数の資料を横断的に分析することが求められている。情報の整理には時間を要したと思われるが、選択肢の紛らわしきはなく、受験者の力を測る良問であったと言える。まさに今後必要とされる力であり、次年度以降も同種の問題の出題に期待するものである。

### 3 総評・まとめ

本稿では2026年度（令和8年度）共通テスト『英語（リーディング）』（本試験）について検討してきた。大学入試センター発表の問題作成方針にも示されているように、「深い理解を伴った知識の

質を問う問題や、知識・技能を活用し思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視する」という方針での問題作成には、大変なご苦勞と創意工夫が必要とされると拝察する。様々な資料や図表を通して英文を読み、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う内容となっており、また、外国語に関する様々な知識を実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付ける、という学習指導要領における目標を反映した出題となっている。受験者が身に付けた力を十分に発揮できる良問も多い。さらに、昨年度からは新しい学習指導要領のねらいを反映した問題形式が出題されるなど、改善への高い意識を感じさせるものであった。しかし一方で、技能統合的な理解を求める問題や、発信技能をより育成するための問題においては、その試みが十分に目的を達せられたかには、まだ議論の余地がある。また、平均点が上昇したことから受験者にとっては取り組みやすいものとなったが、大問数は8問と多く、求められる力の幅が広がり、時間内に解答することに苦勞した受験者も少なくなかったと思われる。今年は選択肢の紛らわしさや、単に作業量が増えることによって生じる負荷は少なかったが、今後も受験者がその力を最大限に発揮できるような作問をお願いしたい。扱われる英文については、その題材や形式については幅広いものとなるように今後も検討をお願いしたい。そうしたことによって、教員の実際の指導や生徒の学びもより豊かなものになっていくと考えられる。

#### 4 今後の共通テストへの要望

新課程テスト2年目となり、新しい要素を含む出題もいくつか見られたが、昨年度と問題構成や作問の方向性に大きな変更はなく、現在の形が更に発展してゆくものと考えている。本稿でもいくつか言及したが、新課程テストでの改訂の目的が十分に達せられたかについて議論の余地がある問題もあった。2022年に大学入試センターより公表された「令和7年度大学入学共通テスト出題の方向性及び試作問題の公表に関する説明資料」には、『5領域の力を総合的に育成する「英語コミュニケーションⅠ」「Ⅱ」と、発信力の強化をねらいとした「論理・表現Ⅰ」の内容に対応』とある。後者の「論理・表現Ⅰ」は『「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」及び「書くこと」の主に3領域を中心とした発信技能の強化』をそのねらいとしているが、今回の問題形式がそれを十分に反映したものであったかについては改めて議論をお願いしたいところである。

問題作成方針において、『「高等学校において、英語を「聞くこと」「読むこと」「話すこと [やり取り]」、「発表」・「書くこと」を統合した言語活動の充実が図られることを踏まえ、情報や自分の考えを適切に表現したり伝え合ったりするために、理解した情報や考えを整理したり、何をどのように取り上げるかなどを判断したりする力を重視する』とあり、5領域を統合した指導によって育成される力を問うものとしている。目標としては大変崇高なものであり、教育現場としても技能統合的な活動や発信技能の強化に向けて更なる授業改善を図ろうとする動機付けにもなっている。だからこそ、そういった指導によって受験者が共通テストで十分に力を発揮する問題作成となっているかについて更なる検証をお願いしたいところである。

これまでも大胆な提案として、将来は英語リーディング試験をリーディングとライティングの2つの技能を測定する試験に、英語リスニング試験をリスニングとスピーキングを測定する試験に変更していくことを検討していただくことをお願いしてきた。後者のスピーキングテストについては、多くの学校現場でタブレットを利用した試験が毎年実施されており、AI技術を利用すれば短期間で採点することも可能であろう。AIを活用した音声採点システムの開発は進んでおり、複数のシステムを組み合わせることで偏りを排した採点が可能となるのではないだろうか。他の3つの領域の測定については、従来の方法に従い問題の構成を変えるだけで可能になる。外部試験の利用は評価基準が複数になり、異なる試験を同一の入学試験に利用することは公平性を担保する上で大きな

問題となるが，共通テストで評価を一本化すれば全ての問題が解決されることは間違いないと判断する。

また，共通テストの得点については，少なくとも国公立大学への出願開始前に受験者に開示していただくことを強く要望したい。受験者は試験中に自らの解答を問題冊子に記録し，試験後は自己採点を行い，そのデータを基に出願の作業に取りかかる。中には解答を転記し損ね，答案を再現する学生もいる。試験時間が足りない上に自分の解答を転記して，決して完全とは言えない自己採点を基に次の個別試験に向けて出願をすることは非常に負担が大きく酷なことだと思われる。得点を開示するまでにとつてもない時間を要することは想像できるが，あらゆることを合理化して何とか実現していただきたい。